

クモ

彼女は細い、白い腕を上げてみせた

その二の腕には、黒子がひとつあった

僕が触れようとするのを彼女は止めた、柔らかに
しばらくの間、私たちはじっと小さな黒子に目を注いでいた

すると黒子はつつと動き出した、肩へ、そして胸へ
私は黒子ではなく、彼女の目を見ていた
ああ、これほどに慈愛のこもる目は見たこともない
さっきの激しい愛撫の後、のぞき込んだときも
静かに、耳近く一言をささやいた時にも
ああ、これほどに優しくはなかった
これほどに深く透きとおってはいなかった

黒子は彼女の乳房の谷間に入り込む
すると彼女はそっと手で追い、導いてやるのだ
ああ、何という優しさだ、慈愛だ
小さな黒い毛の生えた八本足めが丘を上るよ
何と言おうと、彼女は私を制した
暖かな視線をこっちに向けることはできなかった
私はすっかり黒子に嫉妬した

私はすっかり黒子に嫉妬した
勝ち誇るように乳首の前に止まったあいつを
今にあいつは肌を噛むだろう
今に、さらに彼女の肢体を下りるだろう

果たして黒子は下りはじめたのだ
何と言おうと彼女は制した
あいつは小さなくぼみもよけずに下った、そして
そいつがゆるやかな下腹を下りかけた時
私は軽くそいつを掃ってやった！

私はそいつを掃ってやった・・・
すると彼女は指さしたのだ、戸口を
ゆっくりと、失くした黒子を見つめたままに
そして彼女は言ったのだ、静かに、厳かに

「行ってちょうだい」と・・・

(1982.4.21)